

JF 日本語教育スタンダード準拠コース実践 － Can-do リスト作成の試み －

アーパーポーン ナオサラン／トリッティマー ルキラック／ナリサラー トンミー
バンコク日本文化センター

1. 実践の背景

国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）は 2015 年現在、平日夜間と土曜日昼間に日本語講座を 20 コース以上開講しており、登録者数が 400 人に上っている。2011 年度までは中上級レベルのみ開講していたが、2012 年度より JF 日本語教育スタンダード⁽¹⁾（以下、JF スタンダード）に基づいて開発された日本語教科書『まるごと日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）の刊行に伴い、初級レベルも開講するようになった。

初級レベルは、『まるごと』を使用し、2012 年度前期より入門（A1）コース、後期より初級 1（A2-1）コースを開講した。2015 年度後期、入門（A1）から中級（B1）まで開講し、『まるごと初中級』コース終了後、既存の中上級レベルのコースにつながるよう設定している。

一方、『まるごと』コースを除くと、初中・中・上級レベルは技能・目的別の複数のコースが設けられている。2015 年度前期は 18 コース、2015 年度後期は 16 コースとなる。受講生は JLPT の結果を資格として受講する場合と、当センターのレベル判定試験を受験してから受講する場合がある。当センターが設定する初中級レベルは、JF スタンダードの A2～B1 に、中級レベルは B1～B2 に、上級レベルは B2～C1 に相当する。これまでの JFBKK 日本語講座の開講状況は表 1 の通りである。

表 1 これまで開講されてきた JFBKK 日本語講座

開講コース	2011 年 度以前	2012 年度		2013 年度		2014 年度		2015 年度	
		前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
『まるごと』入門		●	●			●	●	●	●
『まるごと』初級 1			●	●			●	●	●
『まるごと』初級 2				●	●			●	●
『まるごと』初中級					●	●			●
『まるごと』中級							●	●	●
初中級レベル						●	●	●	●
中級レベル	●	●	●	●	●	●	●	●	●
上級レベル	●	●	●	●	●	●	●	●	●

2012年当時は『まるごと』以外のコースは、JFスタンダードに基づいたレベル設定をしておらず、初級レベルから中上級レベルにつながる設定が不明確な点もあった。そこで、JFBKK日本語講座の各コースをJFスタンダード準拠でデザインし、Can-do⁽²⁾を使用し、各コースの枠組みを明確にすることにした。本稿では、そのために作成した「Can-do リスト」の作成過程とその使用結果について報告する。

2. 実践の目的と方法

2013年度後期から2014年度後期までの間、JFBKK日本語講座のコースのために「Can-do リスト」を作成した。この実践には大きく2つの目的がある。

目的① JFBKKのJF日本語講座の枠組みの改善

2011年度以前は、それぞれのコースの学習内容、到達目標、使用教材などを各コース担当講師に一任していたため、全コース共通の枠組みができないまま開講されてきた。そのため、講座運営に当たるJFBKK専任講師（以下、専任講師）は、各コースの担当講師がどのようにコースデザインを行うのか把握し切れない部分もあった。そして、各コースの日本語レベル及び目標の設定など、JFBKKのコース運営の標準化を行うのが困難だと思われた。そして、この問題を解決するためには、何らかの改善が必要であると考えた。そこで、2012年度後期より専任講師1名とJF日本語専門家（以下、専門家）1名がシラバスにCan-doを取り入れ、JFスタンダードに基づく授業をした。その結果、講師も学習者も学習目標の明確化ができたことを受け、2013年度前期に他の専任講師を含めた4名がシラバスにCan-doを取り入れた。さらに、2013年度後期より、非常勤講師は専任講師が作成した「Can-do リスト」からCan-doを選定して、担当コースのシラバスに取り入れ始めた。

目的② JF講座を担当する非常勤講師のCan-do使用の促進

全コースでの取り組みにあたって、非常勤講師へどのように働きかけるかが課題だった。長年自分のスタイルで授業を行ってきた非常勤講師にCan-doを取り入れて授業をデザインする、つまりJFスタンダードに準拠した授業をいきなり実施してもらおうとすると反発を招きかねず、また、実施するにしても、コースの目標、学習内容決定からCan-do選定まで全てを依頼するのは負担が大きいと考えた。そこで、非常勤講師の負担を軽減し、かつCan-do使用を促進するため、まず、専任講師が作成した「Can-do リスト」を数回の授業の目標設定に使用してもらうこととした。作成した「Can-do リスト」は、非常勤講師が担当する以下のコースで使用された。

表2 「Can-do リスト」使用コース（非常勤講師担当）

レベル	コース	2013 年度後期	2014 年度前期
初中級	聴解初中級	★	
	通訳入門	★	
中級	漢字中級	★	★
	語彙と文法中級	★	★
	読解中級	★	★
	聴解中級		★
	作文中級		☆
	翻訳中級	★	★
	日本事情中級	☆	
上級	文法上級	★	
	読解上級	★	★
	会話上級		☆
	翻訳上級	★	★
	映像メディア上級		☆
	総合上級	☆	
その他	発音	★	★
	歌で学ぶ日本語	☆	

※★はタイ人講師担当、☆は日本人講師担当。

※斜線は不開講を表す。

3. Can-do リスト作成

3.1 Can-do リスト作成手順

今回作成した「Can-do リスト」とは、非常勤講師が授業目標とシラバス作成に使用できるように、専任講師が選択した Can-do をリスト化したものである。以下に、2013 年度前期用「Can-do リスト」作成過程について説明する。

まず、専任講師が、その学期に開講する全てのコースの学習レベルを設定した。その際に参照したのは、2010 年度から 2012 年度の間に同コースを担当した講師たちが作成したシラバス一覧やオリエンテーション用資料、授業中の配付資料、試験問題などである。

過去に開講されたことのない新しいコースについては、専任講師が「そのコースはどのような内容になるか」を想定し、実践可能な Can-do を「みんなの Can-do サイト⁽³⁾（以下、Can-do サイト）」から選定した。その後、非常勤講師にどのような授業内容を予定しているか聞き、その結果も参考に「Can-do リスト」の見直しをした。以上の手順は図 1 のようにまとめられる。

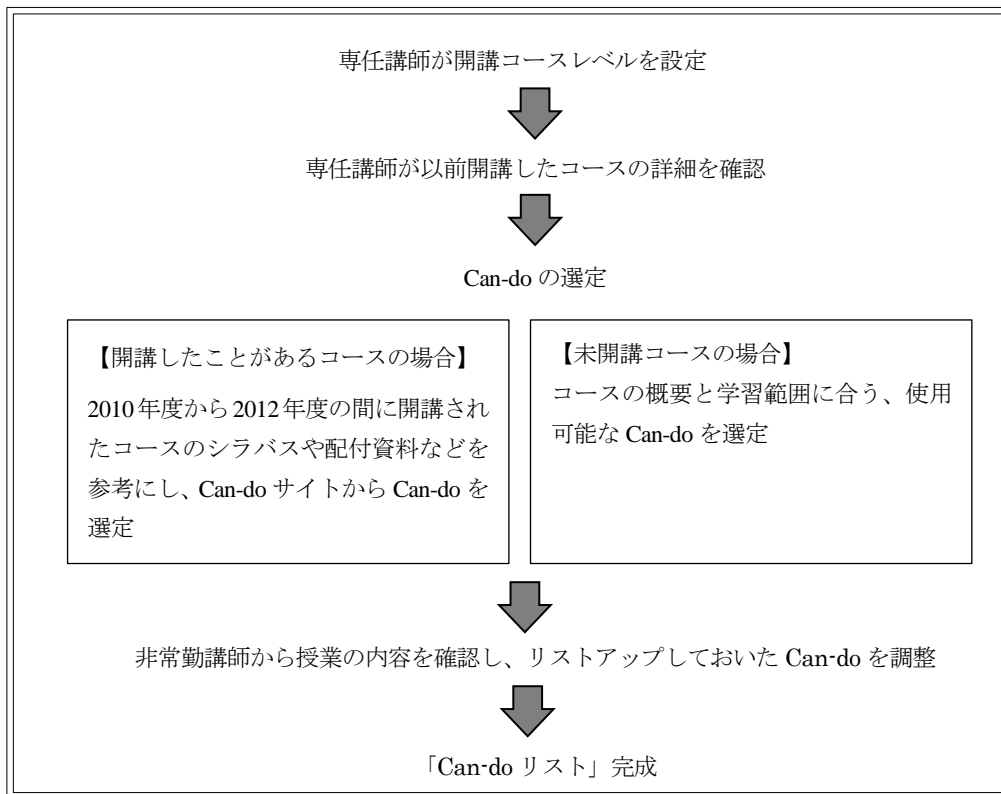


図1 Can-do リスト作成手順

確定した「Can-do リスト」は、非常勤講師に提供した。非常勤講師は、自分の担当コースで考えていた内容に合わせ、授業目標や授業中の活動評価などに使用する Can-do をリストからいくつか選び、シラバスを作成した。

3.2 Can-do 選定

各コースの適切な Can-do を選定するために、下記図2の4つに配慮した。

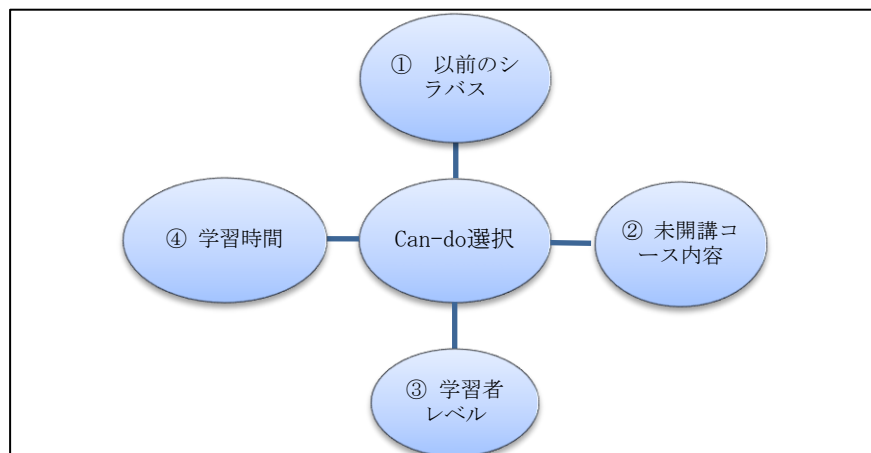


図2 Can-do リスト選定で配慮したこと

「①以前のシラバス」とは以前開講したコースのシラバスで、そのコースが目指していた能力や授業活動を参考にした。学期によって授業活動が多少異なっていたため、主に行っていた活動を拾い集めた。それと同時に、授業の焦点がコミュニケーション言語活動にあったか、コミュニケーション言語能力にあったか、その割合も確認した。

「②未開講コース内容」とは以前に開講されたことがない新コースの内容である。主にタイ人日本語学習者が実践的に日本語を使用でき、有効である場面、あるいは、タイでよく遭遇し、日本語の使用頻度が高い場面をとりあげ、おおまかに授業内容を想定している。そして、それらの場面に合う Can-do をリストアップした。さらに、授業目標や学習内容などを担当講師に確認してから、実践可能な Can-do を追加した。

「③学習者のレベル」は、JF スタンドアードの A1、A2（基礎段階の言語使用者）、B1、B2（自立した言語使用者）、C1、C2（熟達した言語使用者）の 6 段階とし、JFBKK が設定しているコースのレベルをふまえて Can-do を選定した。

「④学習時間」はあらかじめ専任講師が決めている。1 コマ 1.5 時間または 2 時間である。Can-do を選ぶ際には、1 コマの授業で達成できる Can-do とした。

3.3 Can-do リストの例

2013 年度後期、13 コースの「Can-do リスト」を初めて作成した。各コースには 3～8 つの Can-do がある。その「Can-do リスト」のうち「読解コース」と「文法コース」の例を紹介する。

3.3.1 読解中級コースの Can-do リスト

読解中級コースは中級程度の日本語読解能力を伸ばすためのコースであり、B1 レベルである。活動 Can-do の「受容」の、読んで理解できる活動が主となる。定員は 20 人で、週 1 回（120 分）で合計 10 週となる。2010 年度後期から 2012 年度前期の読解コースを概観し、学習内容をまとめると、「ネットショッピングのお知らせ」「依頼」「案内」「お礼」といった場面・内容がよく使われていたことが明らかになった。それをもとに適切だと思われる Can-do をリストアップした。

読解中級コースは以前に開講したことがあるコースのため、Can-do は「①以前のシラバス」「③学習者レベル」「④学習時間」をふまえて選んだ。以前のコース全体で、「様々な読解ストラテジーを学んで、読解力を伸ばす」という点に焦点を当てていたことから、それに一致する活動 Can-do のみ選定した。

また、すでに述べたように 1 コマの授業で扱えるような Can-do を選び、想定は 1 コマ 1 つの Can-do であったが、実際は 1 コマで複数の Can-do が使用されたり、一つの Can-do が複数コマに渡って使用されたりすることもあった。その点と、JFBKK の中級コースは B1 レベル相当としていることから、この読解中級コースは全ての Can-do を B1 レベルにし、20 人定員で、2

時間以内で学習できるものを選定した。

表3 読解中級コースの Can-do リスト

No.	活動 Can-do	能力 Can-do	カテゴリー (レベル)	オリジナル「Can-do」
1	受容	—	情報や要点を読み取る (JF-B1)	簡単なセリフで書かれていれば、漫画を読んで、あらすじを理解することができる。
2	受容	—	必要な情報を探し出す (CEFR-B1.1)	手紙、パンフレット、短い公文書のような日常の資料の中から重要な情報を探し出し、理解できる。
3	受容	—	情報や要点を読み取る (CEFR-B1.1)	身近な話題についての簡単な新聞記事から重点を取り出すことができる。
4	受容	—	手紙やメールを読む (CEFR-B1.1)	旅行中の出来事や感想などが、ある程度詳しく書かれた家族や友人からの手紙やメールを読んで、大部分の内容を理解することができる。

3.3.2 文法上級コースの Can-do リスト

文法上級コースは上級日本語の文法を学ぶという目的で、文法の学習を中心としている。授業では文法運用能力を高めることを目指している。JFBKKの上級コース受講資格は JLPT N2 - N1 の認定で、中には日系企業で働いている者や、数年間の日本留学経験者も含まれるので、受講生の日本語レベルは B2 から C1 と想定している。定員は 20 人で、週 1 回 (120 分) で合計 10 週となる。

表4 文法上級コースの Can-do リスト

No.	活動 Can-do	能力 Can-do	カテゴリー (レベル)	オリジナル「Can-do」
1	受容	—	情報や要点を読み取る (JF-B2)	環境問題などに関する新聞の社説を読んで、新たな情報や筆者の立場・主張とその論拠などを理解することができる。
2	受容	—	情報や要点を読み取る (CFFR-B2.1)	筆者が特別の立場や視点から取り上げた、現代の問題に関する記事やレポートを理解できる。
3	受容	—	読むこと全般 (CFFR-C1)	長くて複雑なテキストでも、難しい節を繰り返して読めるのであれば、自分の専門に関係がなくても、中身を詳細に理解できる。
4	—	言語構造的 能力	文法的正確さ (CFFR-B2.2)	高い文法駆使力がある。時には「言い間違い」や、文構造での偶然起こした誤りや些細な不備が見られる場合があるが、その数は少なく、後で見直せば訂正できるものが多い。

この文法上級コースも、読解中級コースと同様に「①以前のシラバス」「③学習者レベル」「④学習時間」を参照して Can-do を選定した。2010 年度後期から 2012 年度前期の文法上級コース内容を分析すると、「～わけにはいかない」、「～に伴い」、「～つつある」といった学習項目がよく使われていたことが分かった。また、コース全体では N2 から N1 の文法項目を身に付けるのが主な目標になっている。そこで、以前のシラバスで取り上げられている文法項目が実際どのような場面で使用されるかを考えて、活動 Can-do をリストアップした。同時に、文法に焦点をあてたコースであることから「能力 Can-do」（言語構造的な能力）もリストに入れた。

JJFBKK の上級コースは B2-C1 レベル相当に、また、読解中級コースと同様に 1 コマに一つの Can-do が利用できるように設定した。

4. Can-do リストの使用とその結果

4.1 Can-do リストの使用

JFBKK では、学期終了から新学期開始までの期間が約 2 ヶ月間あるが、授業結果や次の学期の開講予定が決められるのは、学期終了 1 週間後になる。その後、専任講師が次の学期に開講するコースの「Can-do リスト」の作成を 2-3 週間以内に行い、「Can-do リスト」が完成したら、メールで非常勤講師に送る。その作業は、大よそ次の学期の開講の 3 週間から 1 ヶ月前となる。

非常勤講師は「Can-do リスト」を受け取った後、「Can-do リスト」から授業に使用可能な Can-do を選び出し、シラバスを作成する。ここでは、専門家、専任講師がメールでシラバス作成の相談にのったり、使用可能な Can-do をアドバイスしたりする。また、直接話し合ったり、以前の資料を見せて、参考にしてもらったりもする。開講 1 週間前に講師会議が開催され、専任講師と非常勤講師が参加する。その際、専任講師は非常勤講師が作成したシラバスの中に「Can-do」が取り入れられているかどうか確認する。

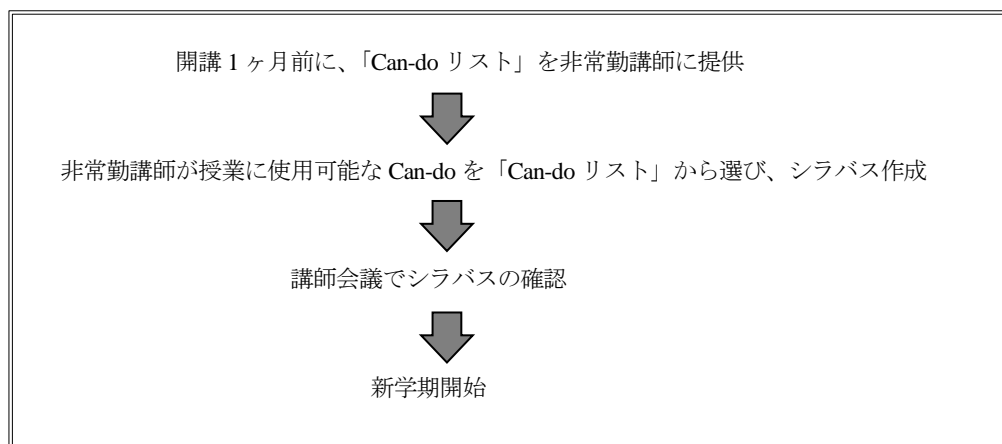


図 3 Can-do リスト使用の流れ

なお、2014 年度後期コース開講後、専門家は非常勤講師数名の授業見学を行い、助言をしている。

4.2 Can-do リストの使用結果

本実践の2つの目的に関して以下のような結果が得られた。

4.2.1 JFBKK の JF 日本語講座の枠組みの改善

2013 年度後期と 2014 年度前期に「Can-do リスト」作成を試みたことで、JFBKK 日本語講座を JF スタンダード準拠に一步近づけることができ、以前よりコースのレベル設定が明確になってきているといえる。『まるごと』コース以外でも JF スタンダードでレベル設定ができるようになり、学習者のレベルも把握しやすくなっている。また、全コースが JF スタンダードに準じることで、JFBKK 日本語講座が統一され、標準化にもつながっている。

4.2.2 JF 講座を担当する非常勤講師の Can-do 使用の促進

「Can-do リスト」の提供は非常勤講師の Can-do 使用の促進につながると想定していたが、実際はどうだったのかを知るために、2014 年度後期終了後、非常勤講師 4 名（タイ人 2 名、日本人 2 名）を対象に Can-do 使用に関するアンケート調査及びフォローアップ・インタビューを行った。インタビューの設問は以下の通りである。

- 問(1) Can-do とは何か以前から知っていますか。
- 問(2) 以前 CFER の Can-do または JF スタンダード Can-do を使ったことがありますか。
- 問(3) 今回提案された Can-do の内容はコースに合っていると思いますか。
- 問(4) いくつの Can-do を使いましたか。その Can-do 項目は使いやすかったですか。
- 問(5) 今回提案された Can-do はどのように使いましたか。
- 問(6) 次回もまた Can-do を使用したいですか。「使う」と答えた方は、どのように使いたいですか。

インタビューを受けた講師は表 5 の通りである。

表 5 非常勤講師の教授歴と担当コース名

非常勤講師	教授歴 (JFBKK で)	担当コース
日本人講師 1 (JP1)	8 年 8 ヶ月 (2 学期)	会話上級
		映像メディアの日本語上級
日本人講師 2 (JP2)	4 年 3 ヶ月 (2 学期)	作文中級
タイ人講師 3 (TH1)	5 年 (6 学期)	読解中級
		語彙文法上級
タイ人講師 4 (TH2)	13 年 (6 学期)	翻訳入門
		聴解中級

まず、「今回提案された Can-do の内容はコースに合っていると思いますか。(問 3)」の回答は、表 6 のようにまとめられる。

表 6 アンケート結果 (問 3)

講師	担当コース	問 3 : コースに合っているか
日本人講師 1 (JP1)	会話上級	合っている
	映像メディアの日本語上級	合っている
日本人講師 2 (JP2)	作文中級	あまり合っていない
タイ人講師 3 (TH1)	読解中級	よく分からない
	語彙文法上級	よく分からない
タイ人講師 4 (TH2)	翻訳入門	よく分からない
	聴解中級	よく分からない

「合っている」と回答したのは JP1 のみだった。その理由をフォローアップ・インタビューで確認すると、「全体的なコースの目標とレベルに合っている」というコメントがあった。

「あまり合っていない」と回答した JP2 は、その理由として、「学習者の実際のレベルに合っていない」や「具体的な Can-do があつたり、抽象的な Can-do があつたりとぼらつきを感じる」を挙げたほか、「JF スタンドアードを自分で正しく理解しながら Can-do を使いこなすのは正直難しい」という JF スタンドアードの理解度についても言及していた。

一方、TH1、TH2 は「よく分からない」と回答した。その理由は、「読解の授業でストラテジーを教えるなど元々自分が教えたいたいものがある」「Can-do リストからどの Can-do を選べばいいかがよく分からない」「コースに応用する方法がよく分からない」といった Can-do の使い方に対する理解度が問われる結果になった。また、「Can-do をコース目標に設定した後、実際に授業したときに Can-do が達成できたかどうかを確認していなかったので、合っているかどうか分からない」という回答もあった。

次に、「Can-do をいくつ使ったか、またその Can-do は使いやすかったか。(問 4)」、「提案された Can-do をどのように使ったか。(問 5)」と、関連のフォローアップ・インタビューの結果を整理すると、表 7 のようになる。

表 7 アンケート結果 (問 4 と問 5)

講師	担当コース	リストの Can-do 数	問 4 :		問 5 : 提案された Can-do をどのように使ったか
			Can-do 使用数	Can-do は使いやすかったか	
JP1	会話上級	6	5	使いやすかった	コースシラバスを作成する際、使用した。Can-do 項目を参考にしながら教材選びをし、コース全体を考えた。自分で Can-do を加えた。
	映像メディアの日本語	4	5		

JP2	作文中級	8	4	やや使いやすかった	目標設定の一部に使用した。予想していた授業の目標に合わせて Can-do を入れた。Can-do の内容を参考にしてタスクを作成した。その後、一部のタスクには Can-do を使って評価を行った。
TH1	読解中級	4	3-4	やや使いにくかった	習った語彙や文法が実際はどのように使われているかタスクに入れて使ったが、やや応用しにくかった。
	語彙文法上級	5	1-2		
TH2	翻訳入門	3	1	やや使いやすかった	選んだ Can-do に合わせ、練習やタスクを作成する。まだ十分に理解できていない。
	聴解中級	6	1-2		

Can-do 使用数は、1～5 であることが分かる。TH1 を除き、全員が「使いやすかった」と回答している。使いにくかった理由としては、「Can-do 選定の仕方がよく分からない」と問3の回答理由と同様である。このように、「Can-do 使用数」と「使いやすさ」との関連性はあまり見られなかった。

Can-do の使い方を見ると、JP1、JP2 がコースシラバスを作成する際や目標設定の一部に使用したというコース全体を考えての使用が窺えたのに対し、TH1、TH2 は選んだ Can-do をタスクに入れて使用したにとどまった。各授業のタスクの一部で使用しやすいということがフォローアップ・インタビューで分かった。

また、TH1 は、語彙文法上級コースでは、Can-do リストの中で「活動 Can-do」が使いにくいと答えている。なぜなら、このコースは文法の知識を教えたあと、学習者の理解力を測るために、JLPT 形式の問題集を使用し、練習させるという流れだったので、授業で教える文法項目を使った、どんな活動をさせればいいのか、実施するのが難しかったという。語彙文法を主な学習項目としたコースで、どのような Can-do を選ぶか、JF スタンドの「能力 Can-do」をどうリストに加え、使用に導くか考える必要があるかもしれない。

最後に、「今後どのように使いたいか、また気付いた点や意見があるか。(問6)」という問いには、表8のような回答が得られた。

表8 アンケート結果 (問6)

講師	どのように使いたいか	気付いた点・意見
JP1	タスク達成や評価に使用してみたい。	・学習者のレベルにバラつきがあるため、使いにくい。
JP2	Can-do と自己評価、教師の評価の3項目を並べて可視化できるようにしたい。	・具体的な Can-do にばらつきを感じた。 ・抽象的な Can-do はどうするか。 ・JF スタンドの講習会などを設けてほしい。
TH1	使用しているタスクに入れてみたい。	・講習会が行われると良い。
TH2	コースの目標に合わせて、新しいタスクを作成したい。	・Can-do を使ったコースのモデル (資料やビデオ) を見たい。 ・Can-do を使う前と使った後を比較するものを見たい。

「どのように使いたいか」という質問に対し、JP1、JP2 両名が今後「評価」に使いたいと答えた。タイ人講師 TH1、TH2 両名が「タスク」に使ってみたいと希望していることが分かった。なお、TH1 は既に使用しているタスクの目標を Can-do で表したい、TH2 は新しいタスクを作成するときに、Can-do をもとに考えたい、と述べている。

「気づいた点・意見」の項目から見ると、学習者のレベル差の問題、Can-do の抽象度の違いによる使いにくさがあることがわかった。また、Can-do に関する講習会の要求があった。

現段階では Can-do をコース全体の目標に利用することまでは求めておらず、授業の目標設定に利用することにとどめたが、「Can-do リスト」ができ、それを使用することによって、非常勤講師の JF スタンダード Can-do 使用に対する意識が以前より高くなり、授業の学習目標の明確化を意識するようになったと思われる。

5. 今後の課題と可能性

今後の課題は、非常勤講師の「Can-do に関する理解・知識」をさらに深めることである。非常勤講師が JF スタンダードや Can-do について理解を深めるためには、以下のことが考えられる。

- ・勉強会や講習会を行う。
- ・専任講師がコース開講前、JF 日本語講座の方針及び Can-do の説明、「Can-do リスト」の使い方とコースデザインに関するアドバイスを丁寧に行う。
- ・コース開始後、授業見学、フィードバックやカウンセリングなどを積極的に行う。
- ・コース終了後、簡単な報告書を出してもらう。

そして、知識が深まった上で、非常勤講師が自ら「My Can-do 作成」を試みることである。

本実践では、専任講師が「Can-do リスト」を作成し、非常勤講師にそれを使用してもらったが、その使用は限定的であった。今後、専任講師が非常勤講師と共に Can-do サイトから Can-do を選定することで、Can-do がコースに合わないといった問題も解決できるかもしれない。その過程を通して、非常勤講師の「Can-do に関する理解・知識」がさらに高まるのではないかとと思われる。

一方、「漢字中級コース」、「語彙・文法中級コース」、「文法上級コース」のように言語知識の学習を強化することを目的としたコースは、どのような Can-do を選定して、Can-do リストに入れるべきなのかについても、さらなる検討が必要である。

以上、報告者はこの実践報告が他の拠点や日本語教育現場の参考になることを強く願う。

[注]

- (1) JF 日本語教育スタンダードは、「相互理解のための日本語」を理念としている。日本語教育関係者が各教育現場のニーズや状況に合わせて、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツールである。
- (2) Can-do とは、日本語の熟達度を「～できる」という形式で示した文である。Can-do は、単語や漢字をいくつ知っているか、どのような文法や文型を知っているかという熟達度のとらえ方ではなく、例えば、「好きか嫌いかを述べることができる」のように言語の熟達のある段階でできる言語活動や、「生活上の単純な要求に対応できるだけの語彙を持っている」のように持っている言語能力の例を示すものである。
- (3) みんなの Can-do サイトは「CEFR Can-do」と「JF Can-do」の2種類のもを提供している。

[参考文献]

- 国際交流基金（2010a）『JF 日本語教育スタンダード 2010』、国際交流基金
- 国際交流基金（2010b）『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』、国際交流基金
- 国際交流基金バンコク日本文化センター日本語部（2011）『日本語部ニュース タウン』第 53 号、国際交流基金バンコク日本文化センター
- 森本由佳子（2011）『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 8 号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp.1-13

[参考サイト]

- 国際交流基金「みんなの Can-do サイト」<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>
- 国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」<http://jfstandard.jp/top/ja/render.do>
- 国際交流基金バンコク日本文化センター「Japan Foundation, Bangkok」<http://www.jfbkk.or.th/>